

## 御茶ノ水橋

おちゃのみずばし

J R中央線・御茶ノ水駅のホームの両端には鋼製の御茶ノ水橋（西側）とコンクリート製の聖橋（東側）があり、神田川の緑の溪流とともに風致地区を形成し、神田学生街のシンボルになっている。

現在の神田川は三鷹市の井の頭池を水源として、東京の山の手を経て、ここ御茶ノ水を流れて、隅田川に合流している。江戸時代、二代将軍秀忠が伊達政宗に命じて、平川、小石川の水を直接隅田川に流すため神田山を掘り割り、水路を造った。これが御茶ノ水堀で、分断された台地の南側が駿河台となった。

武家屋敷や寺社地が大部分だった駿河台や湯島台は、明治時代になって次第に発展を遂げ、架橋要望の気運が高まった。明治22年（1889）東京市区改正条例の発布によって、架橋計画が策定された。23年11月工事に着手し、1年足らずの短期間で、翌年の10月には完成した。驚くべき早さである。

橋長69m、車道幅員7.2m、歩道幅員2×1.8mで、上路形式のピン結合プラットトラスであった。1170トンの錬鉄材だけはベルギーから輸入したが、製作は東京石川島造船所、セメントや煉瓦も国産品であった。路面は2層の木張りで、下層は東京近在産の樺材、上層は尾州産の檜材が使用されていた。木の路面は関東大震災の猛火で炎上し、橋は使用不能となってしまった。

震災復興事業は、日本の橋梁技術の発展に大きな役割を果たし、新技術、新工法が新しい橋梁形式を多く出現させた。昭和6年（1931）に完成した現在の橋は当時ではめずらしいラーメン形式の橋である。ラーメン橋は橋桁と橋脚を一体化した橋で、地震に強いいため、関東大震災後に急速に広まった形式である。その形から方杖ラーメン、πラーメンなどがある。

πラーメン形式の本橋は、神田川の流れをひとまたぎし、右岸側ではJ R中央線もまたいでいる。中央径間は、7列の鋼製の橋脚と主桁が一体構造をなし、張り出し部分でヒンジ連結によって側径間の桁を支えている。橋脚は根元に向けて細くなっていて、コンクリート橋脚との連結もヒンジ構造である。

神田駿河台方面からこの橋を渡ると、橋詰めで直ぐ丁字路となるので、橋の中に隅切りを設けた。市電が通っていたので、市電のカーブに合わせたのだろうか。このようなことは当時では、めずらしいことであった。総工費52万円、鋼材は876トンを使用した。

終戦後しばらく、戦火で家を失った人がホームの対岸の橋の下に住みついていたことがある。獅子文六が朝日新聞に連載していた「自由学校」には、女房に追い出された主人公南村五百助の橋下での自由な生活が描かれている。

[H I]

竣工年月：昭和6年（1931）

所在地：東京都千代田区－文京区

河川名：神田川

橋長・幅員：80.0m×23.0m（車道16.6m＋歩道2×3.2m）

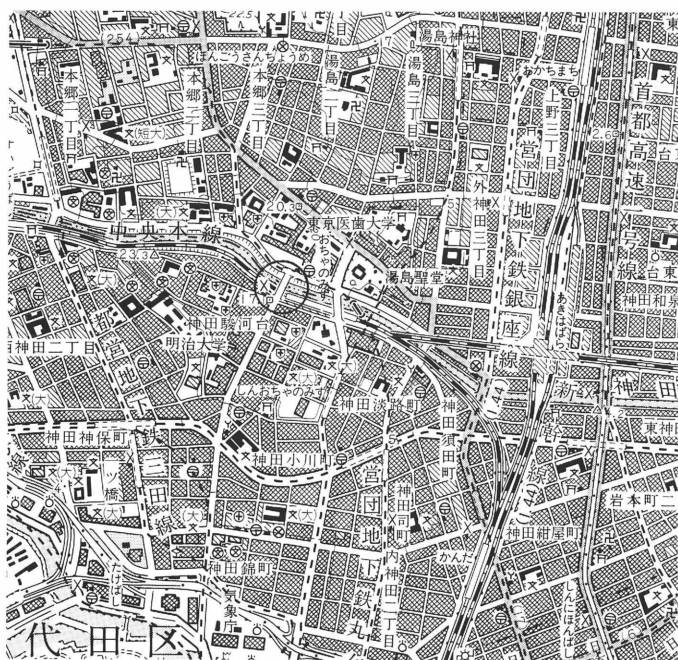
径間数・支間長：1×22.1m＋1×30.48m（脚中心間）＋1×25.91m

形式：π型ラーメン（側径間ヒンジ付き）



聖橋から見た御茶ノ水橋

〈1994年3月5日，写真提供・共に平原 勲〉



(1:25,000 東京首都)

